千葉医学　98：43－50，2022
doi:10.20776/S03035476-98-2-P43

〔話題〕

医学用語語源対話　Ⅷ

杉　田　克　生[1)]　　池　田　黎太郎[2)]

（2021年11月15日受付，2021年12月21日受理，2022年４月10日公表）

Key words: 医学用語，語源，脳神経学

略語一覧: L:ラテン語，ML: 中世ラテン語，LL: 後期ラテン語，Gr: ギリシア語，F: フランス語，OF: 古（期）フランス語，MF: 中期フランス語，G: ドイツ語，ME: 中（期）英語，pp. 過去分詞

哲学者として著名なるカントは，心的能力を三分割し認識能力と快・不快の感情と欲求能力に分けています。我々が知る知・情・意です。この心的能力の上には上級の能力が備わっているとして，認識の上位に悟性，感情の上位に判断力，欲求の上位に理性をあげています。悟性とは要するに理解力であり，自然があるがままの現象として我々に現前するのはこの悟性の力に依っていると述べています。ただしこの自然の基盤を規定するのは理性であり，理性は神・宇宙・魂につながる力でプラトンのいうイデアによって制御されるとしています。ただし著明な哲学者がどのように考えようとその思考する源は脳であり，科学を基礎に置く医学者は心的能力を脳機能の一部であると唯脳論的に考えます。今回は脳の基本的機能を示す医学用語を取り上げ，語源学的観点から脳神経学への理解を深めてみます。

なお用語の語源は主にKlein's Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language[1]から引用し（“　”），英語説明は斜体で示しました。また神経学用語の選定ならびに定義は平山恵造著「神経症候学Ⅰ」[2]から引用し，日本語訳は小児神経学用語集改訂第３版[3]を一部参照しました。

池田：18世紀の大哲学者カントはそれ以後の思想界に大きな影響を与えましたが，彼の代表的な著作には『純粋理性批判』，『実践理性批判』，『判断力批判』の三批判書があります。それらの著作に共通している重要なキーワードは「ア・プリオリ」，「ア・ポステリオリ」（註）という用語です。“a priori”は“L. ā＋priōrī, *from what comes first, from what is before, not derived from experience* ＜ L. pro, prae, *before, in front of;* prior, prius, *former, elder, preceding, better, superior*，形容詞比較級，その奪格形priōrī”が語源です。即ち「ア・プリオリ」は「先にある物，優位にあるものから」を意味し，カント哲学では経験に先立つ「直感，理性，悟性，観念，感覚」を表します。つまり純粋理性とは，経験以前に存在する本来的な理性，真理なのです。“a posteriori”も同様に記せば，“L. ā＋posteriōrī, *from what comes later, what is after, from effect to cause, from experience; inductively* ＜ L. post, *after, later*; posterior, posterius, *later,*

[1)] 千葉大学子どものこころの発達教育研究センター特任教授
[2)] 順天堂大学名誉教授
Katsuo Sugita[1)], Reitarou Ikeda[2)]. Dialogue on the etymology of medical term Ⅷ.
[1)] Research Center for Child Development, Chiba University, Chiba 260-8670.
[2)] Juntendo University, Tokyo 113-8421.
Phone: 043-226-2975. Fax: 043-226-8588. E-mail: sugita@faculty.chiba-u.jp
Received November 15, 2021, Accepted December 21, 2021, Published April 10, 2022.

next, *following*, *latter*, *inferior*, 形容詞比較級，その奪格形posteriōrī”が語源です。即ち「ア・ポステリオリ」は「後にある物，従位にあるものから」を意味し，経験に基づく「感覚，判断，観念」を表します。「先験的，先天的，演繹的」と「経験的，後天的，帰納的」等という訳語がそれらには与えられて，この用語に基づいて壮大な哲学議論が展開されます。（註　ラテン語に忠実に発音すれば「アー・プリオーリー，アー・ポステリオーリー」）

カントの「経験以前」「経験以後」の「理性」「悟性」「観念」「快・不快の感覚」を念頭に置くと，脳の機能と感覚との議論に大いに参考になり指針となります。この“a priori”，“a postriori”はカントの創意による独自の術語ですが，この表現はラテン語では広く用いられていた表現であることを理解しておくことが重要です。たとえば“priori posterius（先立つ物より後になる物）”，“posteriori superius（遅れる物より先んずる物）”などです，カントはこれらの身近な言い回しに新鮮な生命を与えて彼の哲学理念の発展性に富む有力な基本概念にしたのです。カントの哲学に触発されて前置きが長くなりましたが，脳の機能には「経験以前」の本来備わった直感で判断して反応するものと「経験以後」の学習によって反応するものの二つに大別することができます。冒頭に例示された認識能力，知・情・意，理性・悟性・感情などは「経験以前」の本能によるものが支配的であり，それに「経験以後」の要素が加わると様々な「反応，症状，病状」が 呈示されるのだと言えます。

杉田：最初に意識“conscious”ですが，自分自身ならびに周囲の事柄を明確に認識できる精神状態のことです。似た言葉に良心“conscience”がありますが，両語に共通の語源となっている要素は“science”と同様「知っている」が原義です。「知っている」ことは「事の善悪を判断できる」ことで良心につながり，その倫理観が現在科学者に一層求められています。なお程度は様々ですが，十分な意識が得られない状態を意識障害と言います。意識障害は一過性と持続性があり，前者には失神“syncope”と欠神“absence”があります。失神には発作の前に気分が悪くなり顔面蒼白，四肢冷感，冷汗などの前駆症状“prodrome”があります。てんかん発作や片頭痛などで見られる発作の前触れは前兆“aura”と称して分けていますが，前兆自体発作の一部とする見方もあります。

池田：“conscious”の語源は，“L. conscius, *knowing*, *aware of*, con-＋scīre, *to know*”のように，知る“scio, scire”という言葉から作られています。知識は経験によって得られますが，意識，知覚は経験以前のア・プリオリな感覚です。それが知るという行為によって経験を経て知識を蓄積します。失神“syncope”は，1）fainting, swooning，2）contraction of a word，3）the change of rhythm by displacement of the beatなどを意味しますが，語源は“Gr. synkope, *a cutting up*, *cutting short* ＜ Gr. synkoptein, *to cut up*”です。ここでは本来は「短縮，切り詰め」を意味する言葉が，樹を切り倒すように意識，知覚を失って倒れる病状を表現するために用いられています。欠神“absence, F. absentia”＜ L. absēns, abesse, *to be away from, be absent*; ab＋sum, *away*＋sum, *I am*（L. ab＋esse）”は“esse, *to be*, *being*（存在）”から離れることあるいは失うことを意味します。

前駆症状“prodrome（a premonitory symptom）”は，感染症などの発疹や発熱などの症状が全開する前の予兆であり，“L. prodromus ＜ Gr. prodromos, *running before*; pro, *before*＋dromos, *a running*”「先駆け」がその源義です。それに類する用語に前兆“auraがありますが，これは“aura, *emanation*, *aroma* ＜ L. aura *breeze*, *wind*, *air* ＜ Gr. aura, *air in motion*, *breeze*, *air*”から派生し，「空気，動く空気，微風」を意味します。それは「疾風，強風，暴風」の予兆でもあり，注意深い船乗りはその気配

を察して帆の調整をします。神話ではアウラーは酒神ディオニューソスの求愛を拒否して逃げ回ったすえに罰として狂気に陥る妖精として寓意的に描かれます。この名は“epileptic aura（てんかん発作の前兆）”として，発作の始まる前の主観的感覚または運動症状に用いられます。

杉田：持続性の意識障害では，意識の清明度が低下する意識の混濁と，意識の内容が変化する意識の変容があります。意識の混濁として軽症から重症に分類すると，意識不鮮明“confusion”，傾眠“somnolence”，嗜眠“lethargy”，混迷“stupor”，昏眠“sopor”，昏睡“coma”などがあります。意識の変容では，脳炎の初期などに見られるアメンチア“amentia”，譫妄“delirium”，夢幻状態“oneiroid state”，朦朧状態“état crepusculaire（F.）”，錯乱状態“confusional state”などがあります。なお以前から意識障害と痴呆“dementia”の鑑別として，睡眠・覚醒リズムの有無がありましたが，重度の痴呆患者では病変が脳幹に及べばこのリズムも障害され，無為の睡眠状態となります。“amentia”と“dementia”など接頭語の使い分けは日本人にはやや難しいところがあります。

池田：経験によって得られた知識が生活する上で活用されるためには，本人の「意識」が鮮明でなければ生かされませんが，それが乱れると下記のような症状が現れます。意識不鮮明“confusion”，錯乱状態“confusional stateは，“ME. confuses, OF. confus < L. cōnfūsiōnem < L. cōnfūsus, *confused*, pp. of cōnfundere < L. cōnfundo, *to pour together*”すなわち液体を注ぎ混ぜ合わせた様な精神の混乱状態です。傾眠“somnolence, *sleepiness, somnolent, sleepy*”は，“L. somnolentus, *sleepy, drowsy* < somnus, sopnos, supnos < Gr. hypnos, *sleep*”からです。つまり眠り，睡り“somnus, hypnos”は共通の語根を持つ言葉なのです。嗜眠“lethargy, *morbid drowsiness, torpidity*（鈍感，無気力）”は，“F. léthargie, LL. lēthargia < Gr. lēthargia, *forgetfulfness*. lēthē, *a forgetting* < Gr. argos, *idle, lazy, not working*”つまり生きる意欲を失って忘我の境地に陥った無気力状態を表します。

上記の“lēthē”「レーテー」はギリシア神話では冥府の国を流れる河の名であり，死者がいったんその水を飲むと生前の記憶を全て失うと言われます。そのためこの河は「レーテー」（忘却）の河と呼ばれるのです。また死者が地下で冥府に入るためには，その境を流れるアケローンという名の別の河を渡し守カロンに船賃を払って越えねばなりません。死者の口中に小銭を含ませる風習はそのためです。死者がそれを渡りレーテーの河水を前にしてそれを飲もうかどうしようかと迷っているのが，この死に瀕した患者の心理だと解釈することができます。これは単なる無気力や鈍感を示すのではなく，生前の記憶を失うことを恐れて生死の境で迷っている状態であると考えると病人への理解と同情が増します。ギリシア神話は人類の素朴な経験と知識を物語りの形式で表現したものですが，意外に医学的な人間への洞察力に富んでいますね。

昏迷は“stupor, *torpor*（遅鈍，無感覚），*lethargy*. MF. < L. stupor, *numbness, dullness*. cf. stupēre, *to be struck senseless, to be numbed stunned*. → stupidity（愚鈍）”，昏眠は“L. sopor, *deep sleep*”です。昏睡“coma, *a state of insensibility*”は，“Gr. kōma, *a deep sleep, slumber, lethargy* < Gr. keimai, *to lie, lie asleep, lie sick, lie dead*”で，単なる昏睡状態ではなく放置すると死に至ります。アメンチアは“amentia < L. ā, *away*, +mens, *mind*”，痴呆（認知症）は“dementia, *a form of insanity, a being out of one's mind* < dē, *from, away from, out of*, mēns, *mind*”が語源ですが，どちらも心の正常な状態から外れていることを意味しています。

譫妄“delirium, *a violent mental excitement*; dēlirium, *madness*”は，“L.

dēlīrāre, *to turn aside from the furrow*, līra, *the furrow*”つまり耕作しながら畝から逸れること，常軌を逸することです。夢幻状態“oneiroid state”は，“oneiro-, *dream* < Gr. oneiros, *dream*（夢）”の意で，関連語として“oneiroanalysis（夢分析）”，“oneiromancy（夢占）”，“oneirocritic（夢判断）”などがあります。朦朧状態“état crepusculaire (F.)”は，“L. crepusculum, *partial night, twilight, dusk of the evening* < L. creper, *dark, uncertain, obscure*”です。「宵闇迫れば---悩みは尽きせず」なる歌詞がありましたが，暗くなるのは周囲の景色ばかりではなく心の中の心象風景までもなのでしょう。

杉田：最近睡眠の研究が進んでおり，概日リズム“circadian rhythms”の分子機構が解明されています。一方睡眠障害としては，睡眠感が量的ならびに質的に十分得られない不眠症“insomnia”，があります。一方昼間の覚醒が十分得られないのを過眠症“hypersomnia”あるいは傾眠症“somnolence”と言い，代表例としてナルコレプシー“narcolepsy”があります。ナルコレプシーはオレキシン“orexin（hypocretin）”を産生する視床下部ニューロンの障害が原因とされます。ナルコレプシーの四徴としては，睡眠発作，脱力発作“cataplexy”，入眠時幻覚“hypnagogic hallucination”，睡眠麻痺“sleep paralysis”があります。一般的に筋より上位の病変では運動麻痺，筋肉自体の病変による場合を筋脱力と使い分けてきました。“cataplexy”は中枢神経障害なので，本来は「運動麻痺発作」と称すべきですが，広義の脱力の意味で使っています[2]。睡眠薬は“narcotic, *producing insensibility* < Gr. narkōtikos, *benumbing*”ですが，「痺れる」の意です。

池田：「睡眠」ということばがこれまでに病状としてしばしば使われてきましたので，ここで眠り“hypnos（ヒュプノス）”のギリシア神話に触れてみましょう。神話では眠りの神ヒュプノス（Hypnos）は，夜の神ニュクス（Nyx）の子であり，死の神タナトス（Thanatos）の兄弟とされます。この神は翼ある青年の姿で訪れて，木の枝で静かに触れながら液体を注ぎ掛けて人を死の眠りに導きます。上記の状態が長く続くと下記の病状に繋がり，その結果は死をもたらします。ここでは「夜，眠り，死」との関連が物語りになっていますが，病気にも似たような相関関係があります。

概日リズム“circadian rhythms < L. circa, *round about nearly*; dies, *a day*”，不眠症“insomnia, *sleeplessness* < L. insomnia, *want of sleep*, insomnis, *sleepless*, in, *not*+somnus, *sleep*. somnolent, *sleepy* < L. somnolentus, *sleepy, drowsy*”，過眠症“hypersomnia, hyper=super; *excess, abnormal excess*（opposite of hypo-），“hyposomnia（睡眠不足，不眠症）”，傾眠症“somnolence, *sleepiness*, somnolent *sleepy, drowsy*, somnus, *sleep*, somni-facient,（facere, *to make*），somni-ferous（ferre, *to carry, drive, produce*）催眠性の“などの用語があります。ナルコレプシー”narcolepsy, *recurring attacks of sleep*, narcoleptic, *pertaining to, affected with*”は“Gr. narke, *numbness*+lepsis, *a taking, seizure*”からです。オレキシン“orexin”は“orectic, *pertaining to desire or appetite, appetitive*（欲求の，願望の，食欲の）< Gr. oreksis, orexia, *desire, appetite*”から派生しています。またその関連用語には，“anorexia（食欲不振）”，“dysorexia（食欲異常）”などがあります。

脱力発作“cataplexy”は，感情的刺激が引き金になって誘発される筋力の低下であり，しばしばナルコレプシーに伴います。語源的には，“Gr. kata, *down to*+Gr. -plexy < -plexis < Gr. plēxis, *stroke, percussion* < Gr. plēssō, *to strike, smite*”です。ちなみに麻痺“plegia”は“Gr. plēgē, *a blow, stroke*, L. plāga”からの造語です。運動麻痺であることから脱力発作を“cataplegia”とは称しませんでした。私の考えでは，このcataplexyの考案者には「発作，麻痺」を表す言葉として，“-plegia”を使用するより

も，“-lepsy”と対称的な“-plexy”を使用してみたいという独自の主張があったのではないでしょうか。なお“cataplexy”と似た用語で“catalepsy”があります。語源は“Gr. katalēpsis, *seizure* < Gr. katalambanein, kata, *down to*, lambanein, *to take, grasp*”です。

入眠時幻覚“hypnagogic hallucination”は“Gr. hypnos, *sleep*, hallucination < hallūcinātiōn, Gr. halyein, *to wander in the mind, to be ill at ease, be distraught, to wander or roam about*（幻覚）”から，睡眠麻痺“sleep paralysis”は“Gr. paralysis（麻痺）, *a loosening by the side palsy* < Gr. paralyō, *to take off, detach, undo*”です。ナルコレプシーの「ナルコ」は“narcotic（麻酔薬，麻薬，催眠薬）”の略語であり，“ML. narcoticus < Gr. narkotikos, *benumbing* < Gr. narke, *numbness*（無感覚，麻痺，痺れ）”からきています。その応用は麻薬中毒“narco-mania”，麻酔療法“narco-therapy”，麻酔催眠“narco-hypnosis”などの用語に見られます。

杉田：大脳は体性感覚野，視覚野，聴覚野などの一次感覚野や一次運動野がありますが，両者の情報を分析，統合，変換する機能を連合機能と称します。それを担うのが連合野であり，言語，記憶，認知，行為などを適切に遂行なさしめています。言語障害としては，会話言語の障害である失語“aphasia”，文字言語の障害である失読“alexia”と失書“agraphia”があります。

池田：連合“association”とは“L. associāre, *to join to, unite with* < ad+sociāre, *to join together, unite*, socius *accompanying, acting in union; a companion partner, ally*”という語源が示すように，連想によって物事を結合させることを言います。だから下記の症状も言葉や文字の知識が欠如しているのではなく，その知識を「読み，書き，話して」表現する能力と結合させる機能が障害されているため生じる症状です。失語“aphasia”は“L. ā+Gr. phanai, *to speak, loss of the faculty of speech*’”を意味し，発声器官や聴覚は正常だが言葉の理解や表出ができない状態です。失読“alexia, *inability to read*”は，語源的には“a+lexis, *speaking, saying, speech*”なので，正しくは「会話能力不全」とすべきです。これは“L. legere, *to read*; Gr. legein, lexis, *to speak; speech*”との混乱によると，Kleinの辞典にも明記してあります。一旦医学用語として確立すると修正は不可能なのでしょうか。失書“agraphia（書字不能）”は“a+graph, *inability to write* < Gr. graphein, *to write*; graphe, *writing*”を意味します。

杉田：記憶“memory”とは定義が難しいですが，「己が過去に蓄えた経験を現在に再現できるもの」とまとめられます[2]。種類としては陳述記憶“declarative memory”と非陳述記憶，意味記憶“semantic memory”，出来事記憶“episodic memory”と手続き記憶“procedural memory”があります。記憶の障害は健忘“amnesia”と称されますが，「健」とは「著しい」を意味します。この接頭辞には本来の意味を超えて，単に強調の意味で使用されているのも散見されます（例えば，健啖，健筆など）。健忘としては個人の生活歴が中断し，記憶に「隙間」が生じた“amnésia lacunaire（F.）”や，記憶を想起する際に実際は体験していないことが入り混じって表現される作話“confabulation”などユニークな病名があります。

池田：記憶の用語のもとになったムネーモシュネー（Mnēmosynē）は天空ウーラノスと大地ガイアとの娘であり，ゼウスと彼女との間に九人のムーサ芸術の女神たちが生まれたとされます。つまり天地創造と人間活動の根元を形成する重要な存在なのです。以下の用語も大脳の存在価値に関わる重要な基本的能力を表す言葉であることがよく理解できます。記憶という用語には“mneme”と“memory”があります。“mneme”は「個人または民族の内奥に根深く残る過去の記憶」であり，これは上のMnēmosynēの神話として残り，その語源から“mnemonic（記憶

の)”, “mnemonics（記憶術）”などが作られています。“memorial ＜ Gr. mneme”が単なる個人の記憶のみならず「偉人，重大事件の記念碑，記念館，年代記」を意味するのも上の語との関連から理解できます。またその意味を強調するために“commemorate（記念式を挙行する）”, “commemorative（記念品）”, “commemorator（記念祭挙行者，参加者）”があります。

もう一つの“memory”も関連語であり，「記憶，記憶力，記憶内容，追憶，記憶容量，記憶（塑性）復元力，復元作用」などの意味に発展して使われています。この能力が阻害されると下記の様々な症状が発現すると言えるでしょう。陳述記憶“declarative memory ＜ declarative, declare ＜ L. dēclāre, *to make clear, make evident*”は，ただ記憶内容を述べ立てるだけではなく明確に説得力を伴う陳述が期待されるのでしょう。非陳述記憶，意味記憶“semantic memory（semantic, *pertaining to meaning*）＜ Gr. sēmantikos, *significant, meaning*”は，記憶内容の意味を当人が理解し説明できることが前提になります。それができないと“semantic aphasia（意味性失語）”として会話に支障をきたします。出来事記憶“episodic memory”は“episode, *addition, episode*（挿話）＜ Gr. epeisodios ＜ epi, *on, in addition to*＋eis, *into*＋hodos, *way*”が語源です。手続き記憶“procedural memory”の語源は“procedure（*going before, going forward*）＜ L. pro, *before*＋cedere, *to go, move, walk*”です。

健忘“amnesia, *loss of memory* ＜ Gr. amnesia, *forgetfulness* ＜ a＋mnēsios, *pertaining to memory* ＜ mnaomai, *I remember* ＜ men-, *to think, remember*”は過去の記憶の喪失，欠如を言います。これもいろいろな組み合わせが可能で，“auditory amnesia（聴覚性健忘症）”, “emotional amnesia（情緒的健忘症）”, “traumatic amnesia（外傷性健忘症）”などがあります。“lacunar amnesia（隙間健忘症）; amnésia lacunaire（F.）＜ L. lacūna, *hole, hollow, cavity*”は記憶の諸処に断絶があることを意味します。作話“confabulation, *to talk together, chat*; confabulate ＜ L. con＋fābulor, *to speak, talk, chat*”は，記憶の内容が気楽にお喋りしている感覚で止めどなく想像力が発展して現実との境界が定まらなくなる状態を表します。それを意識的に行えば詐欺師ですが，無自覚ならば病気でしょう。しかし文学史に残る大詩人にもこのような傾向は見られます。そのときは非凡な才能として認められ芸術の女神ムーサの恩寵に与ると表現されます。

杉田：認知“cognition”とは「対象が持つ意味や概念を把握する」ことです。各感覚受容器で受容された情報は一次感覚野に伝えられます。ここで対象の持つ形態や性質，あるいは自己との相対関係，置かれている位置などの特徴を感知，分別することが知覚“perception”です。ラテン語“noscere（古形はgnoscere），*to know, acknowledge, perceive, recognize*”は，単なる感覚的な知り方ではなく精神の働きによって「認識する」を意味します。“ignorant: i-(in-)=*not*＋gnoscere＝*to perceive*”は目で見て耳で聞いていても，心で受け止めないことを意味しますが，語源的に感覚と知覚の違いを反映しています。体性感覚や視覚，聴覚などの知覚情報はそれぞれ中心後回，鳥距溝，上側頭回から周辺での高次的処理を受けて側頭－頭頂連合野などへと伝達され，その対象の持つ意味や概念が把握すなわち認知されます[4]。その障害が失認“agnosia”です。失認には，物体失認として手の中にある物がわからない立体失認“astereognosis”，一般物体とは脳内認知機構が違うと考えられている顔貌の失認（相貌失認）“prosopagnosia”，自己の身体を対象とした失認（身体失認）“somatoagnosia”などがあります。余談ですが，認知“cognition”で思い出される英語に，“travel incognito（お忍びで旅する）”があります。

池田：認知“cognition, *knowledge, perception*”，は，

“L. cognitiō, *a becoming acquainted with, acquiring knowledge* < L. cognōscere, *to perceive, understand, know* < L. nōscere, Gr. gnōscere, *to know*” です。知覚“perception, *understanding*”は“L. perceptio, *a taking, gathering, collecting* < L. percipere, *to take possession of, observe, perceive* < per, *through*+capere, *catch, seize, take hold*）です。認知も知覚も「知識を得る」という基本語を，co-, per-という接頭辞で強調しています。そしてラテン語の“noscere”,“cognoscere”はギリシア語の“gnoscere”を基にしていますが，“gnosis, *knowledge*”から推測できるように，知る“to know, G. kennen”という言葉は“gn-, gene-, geno-”という共通の基語を持っています。だからそれを否定する接頭辞in-を加えると“ignorant < in+gnoscere”となり，不知識，無知という意味になります。知覚“perception”はその「知識を得る」ことを強調しています。

失認“agnosia”，立体失認“asterognosis”，相貌失認“prosopagnosia”，身体失認“somatoagnosia”などもその流れで説明できます。失認“a+gnosia”，立体失認“a+stereognosis=*the ability to recognize an object by touch*, stereo, *solid, firm* < Gr. stereos, *firm, hard, solid, stiff*”から判断すると，語義的には硬くて堅固な物体に触れて形態を認知する能力の障害です。相貌失認“prosopagnosia（prosopo+a+gnosia < Gr. prosōpon, *face, countenance, person*”は顔の認識ばかりでなく，人物の特定まで含んだ認知障害です。そう言えばprosopography（人物紹介）はその人の経歴や性格描写を意味します。またprsopopoeiaは擬人法“personification”といいますから，顔よりも人間に重点が置かれています。そうすると顔を見てその人物の性格や経歴のみならず運勢まで判定する人相観の易者はこの能力に優れていることになります。身体失認“somatoagnosia; somato+a+gnosia < Gr. sōma, sōmatos, *body*”は身体の認識感覚が欠如する症状であることが判ります。

杉田：動作とは「事を行う際の身体の動き」であり，「行為」とは目的概念や動機があって行う意志的動作と一般的には分けられます[2]。英語では“movement”,“motion”,“action”,“performance”,“behavior”,“exercise”などの単語がありますが，医療的には（認知）行動療法や運動療法の用語として知られています。なお求心性感覚系と遠心性運動系を大脳内で機能的に連絡する大脳連合系の障害のため適切な運動情報に変換されない病態が失行“apraxia”です。Liepmannは失行を運動性失行“kinetic apraxia”と観念性失行“ideational apraxia”にわけ，前者をさらに肢節運動性失行“limb-kinetic apraxia”と観念運動性失行“ideo-motor apraxia”に分けました。肢節運動性失行は単純な動作もできず，自発動作，指示された動作，模倣動作も遂行できません。一方観念運動性失行は自発的な動作は可能ですが，指示されて意識的な動作，行為ができないことから，運動に関する観念が障害されておこると考えられています。プラトンは事物を真に理解するとはどういうことかを考えるにあたって，心の中に認識される“idea”こそ最も確実と考えましたが，上記の病態分類には提唱者の哲学的素養を感じます。

池田：上にあげた「動作」の英語には，それぞれ以下のような日本語訳が対応して特有の言葉の背景を持つことを伺わせます。“movement（動作，挙動，活動，移動）”,“motion（運動，動作，動議，提案）”,“action（行動，実行，行為，所作）”,“performance（公演，演奏，実行，成績）”,“behavior（態度，品行，調子，反応）”,“exercise（訓練，練習，体操，儀式）”などですが，それらの言葉を行動療法や運動療法としての医療の観点から見る場合にはまた別の独自の表現がなされます。

失行“apraxia, *inaction* < Gr. a+praxis, *a doing, action, transaction, business, exercise, practice, dexterity*”を語源だけか

ら判断するなら,「実行, 行動, 取引, 業務, 運動, 練習, 巧妙な行動」ができないことを意味します。これらの行動には素人と専門家がそれぞれ多数いるのですから, 各分野の達人から見れば残りの大衆は皆不能症に分類されるでしょう。観念性失行“ideational apraxia”は異なるものを使う一連の複合的プログラムが観念面で障害されていることを意味します。筋節運動性失行“limb-kinetic apraxia”は,“kinetic, *pertaining to motion* < Gr. kīnein, *to move*”, 観念運動性失行“ideo-motor apraxiaは“ideo, *idea*, *form*, *idea* < Gr. ideā, *form*, *kind*, *sort*, *nature*, *class*, *species*, *opinion*, *notion idea*, *ideal form* + motor, *mover* < L. movēre, *to move*”が語源的意味です。

抽象“abstraction; abs, ab, *away from*, *from* + trahere, *to drag away*, *draw away*, *remove*”は「引き出す, 抽出する」ことですが, その対象は心の中に捉えた“idea（心象, 概念)”でしょう。それをどのように言葉に表して, 身体で表現するかが“praxis（行為)”であり,“motus（運動)”なのでしょう。 そこで究極的には“idea（= mental conception)”が重要な出発点になりますが, 英語“idea”の訳語には「考え, 観念, 予感, 想像, 理解, 知識, 着想, 計画, 思想, 表象, 直感, 幻想」があります。そして大脳の役目はこれらすべての機能を司ることなのです。そしてこの根源的な機能の対象がそもそもどこに存在するのか, 大脳がどのようにしてそれを感知して論理的に解釈し, 意志決定して神経に伝達するのか, それはもう哲学的思索の範疇です。ここで冒頭に掲げたカントの哲学が活躍の場を得ます。彼の哲学体系は「ア・プリオリ」,「ア・ポステリオリ」, 経験以前と以後の観念, 直感, 理念であると学びましたが, 今確認した大脳の思索対象すべてがこの範疇に収まります。“a priori（より先に在るものから)”とは人智以前, 宇宙の存在以前, 最高善以前の倫理などが問われる思考体系です。このような命題を前にして大脳の機能を思索するのもまた気宇壮大ではありませんか。

杉田：人は見ているものに似せて心にイメージ（心像）を描きますが, それを高度な知力によって抽象化“abstraction”し, その物の本質“essence”を理解し, その上で概念“idea”へと純化させます。医療者はその抽象思考によって疾患の本質を概念化する毎日です。医学用語語源を学ぶことは, 歴史の変遷の中で医療者がどのように疾病をとらえ, 何が本質かを時代感覚とともに知ることができます。医学用語の由来をたどり核心的意味を探し当てる「哲学的思索」を一層深めたいものです。

貢 献 者

杉田と池田は本稿を執筆し, 最終稿を確認した。

財源支援

本報告は「挑戦的萌芽研究（平成30年度－令和２年度)「神経発達症への包括的社会脳育成プログラム開発ならびに教員養成（研究代表: 杉田克生)」の助成（令和４年度まで延長）を得て実施した。

利益相反

著者らは利益相反を有しない。

倫理的承認

非該当。

データの可用性

非該当。

謝　　辞

本稿の内容につきご助言いただきました亀田総合病院脳神経内科部長福武敏夫先生に深謝いたします。

参考文献

1）Ernest Klein.（1971）Klein's Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language. Oxford: Elsevier Scientific Publishing.
2）平山惠造.（2006）神経症候学Ⅰ　改訂第２版, 東京: 文光堂.
3）日本小児神経学会用語委員会編.（2010）小児神経学用語集改訂第３版, 東京: 診断と治療社.
4）河村　満.（2021）連合野ハンドブック完全版, 東京: 医学書院.